

氏名	よしもと えつこ 持元江津子
学位(専攻分野)	博士(経済学)
学位記番号	経博第195号
学位授与の日付	平成16年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	経済学研究科現代経済学専攻
学位論文題目	芸術のもつ公共性を保持育成するための政策について：ケインズの理論と実践より
論文調査委員	(主査) 教授吉田和男 教授小島専孝 教授根井雅弘

論文内容の要旨

持元江津子氏から提出された博士学位請求論文『芸術の持つ公共性を保持育成するための政策について：ケインズの理論と実践より』は序と6章及び終章がらなり、芸術の持つ公共性を保持育成するための財政支援のあり方をケインズの芸術論と実践を通じて考察しようとする極めてユニークで意欲的なものである。即ち、アーツ・カウンシルがケインズの生涯後半生に渡る芸術支援活動を貫く信念及び理論の帰結の一つであったことから、ケインズが芸術支援に関してどのような理念を持ち、どのような政策理論を形成して実践に移していったのかを解明し、今日における芸術支援のあり方に示唆を与えようとするものである。

第1章では全体の序論と位置付け、芸術のもつ「公共性」について、ケインズの生きた時代に焦点を当てて整理・考察する。ここでは、多義的な用語として使われる「公共性」に代わり、ハーバーマスの定義した「公共圏」概念を導入する。すなわち、芸術は「道徳の本質が洞察されうる場」であり、芸術と芸術家の卓越性が人々の間に「共感」を呼び起こし、共同体を豊かにしうる故に、芸術を上手く組み込んで「公共圏」を創出または拡大した場合、共同体の構成員に何らかの影響を及ぼしうることを示す。

また、芸術は、文字を知らない人々にも強くアピールする故に「公共圏」の参入条件を著しく切り下げ、芸術を通じる「公共圏」の拡大に大いに寄与する。従って、芸術は「公共圏」の創出・拡大の手段となり得、政治的体制に利用される危険にさらされやすい。この種の危険を回避する方策の一つがケインズが実践したアーツ・カウンシルの創設であった。

第2章においては、芸術のもつ「公共性」及び「公共圏」との関連性を取り入れながら、ケインズの芸術論の推察と構築を試みる。ケインズの芸術論の展開を3期に分け、ケインズが、G.E. ムーアの「美」の概念を拡張して、人々に「善い心の状態」を喚起するものとしての独自の「fit, fitness」概念の導入を図り、芸術は「fit」するものの代表であると彼が考えていたことを論証する。そして、芸術に関する政策立案を巡って、ロジャー・フライがケインズに与えた影響の深さについて論じる。

さらに、ケインズの芸術を梃子に健全な社会を建設するという考えは、芸術を「広報手段」として、健全な参加者からなる健全な「公共圏」の創出・拡大となることから、芸術の活用を通して物質生活と精神生活双方の文明化を進めることによって社会は改良され得る、それ故、芸術は多分に「公共性」をもつとの結論であるとする。

第3章では、英国固有と思われるジェントルマン文化の流れに注目して、ケインズが芸術支援者としてジェントルマン階層を軸とする新興富裕層に期待を寄せ、啓発・啓蒙活動に取り組んでいたことを解明する。加えて、それらの活動が、ラスキンの『芸術経済論』を間接的に継承するものであり、フライと協同して行われたことを論証する。

第4章では、ケインズが創設者としてかかわったアーツ・カウンシルの意義について論じる。ケインズは、芸術家集団による「企業経営」の破綻と非芸術家が介在する「協同組合」の挫折を直接間接に経験し、そこで得られた教訓を基に、芸術のことを芸術家に任せたまま、財政支出を受けながら政府介入を最小に抑えた半独立的な国家機関の必要性を見だし、ア

ーツ・カウンシルの始動に至った。アーツ・カウンシルは、芸術の生産者である芸術家とその消費者・享受者である一般大衆との相互依存の円滑な進捗を直接の目的とし、芸術の生産者と消費者をつなぐ媒介機構となるように期待されていた。ここではドロッカーが非営利組織に求める「コミットメント」が必要とされ、非営利組織であるアーツ・カウンシルが芸術の間接的な供給者の在り方の1つであることを、実証しようとした一大実験であったという結論を得る。

第5章では、ケインズが芸術支援を義務と捉えた哲学的根拠を解明する。ケインズは、倫理的な観点から、芸術支援を自らの負うべき「義務」として捉えていた。彼は、「人間らしい情愛と美を解する楽しみ」を目標にして「公的義務または私的義務を遂行することは正しい」という主張をG.E. ムーアから受け継いでいる。彼は、ここに「利他主義」を部分的に取り入れ、「万人の共有する善」にもっとも近い「望ましい」状況を社会の構成員が「善い心の状態」に満たされることと前提し、そこに至る一手段として芸術供給を据えた。故に、国家規模の芸術支援活動も個人的な芸術支援活動も、ともにケインズの「義務」となる。

第6章では、第2章で論じたケインズの美学概念「fit, fitness」の起源がエドモンド・パークの美学にあることを論証する。パークは『崇高と美の観念の起原』に於いて、「fitness」を合目的な手段がもたらす効用や生物学的な意味で用いたが、若きケインズは、その美学用語を継承せず一旦否定した上で、美に関して客観的に測定可能なほど外観へのこだわりを見せるパークの見解とは対立しながらも、それに「善い心の状態」を喚起しうる性質という新しい意味を与えたことを示す。

終章では議論を総括し、我が国の芸術を取り巻く環境への応用の可能性を探る準備段階として行った実証的研究の成果を示している。

論文審査の結果の要旨

本論はケインズの芸術論を中心にして文化経済学の主要論点である芸術支援のあり方を論じたユニークで優れた論文である。また、ケインズの文献だけでなく、ブルームズベリーの一員であったロジャー・フライやケインズの哲学の師であるG.E. ムーアといった人々の関連文献を丹念に読み、経済学者でありながら芸術支援グループのブルムズベリー・グループで活躍し、人生の後半年の大半をアーツ・カウンシルと言う芸術・芸術家支援団体に情熱を注いだケインズの芸術観に迫ろうとし、そこから芸術の「公共性」を通じて文化経済学の主要テーマである芸術支援の在処を示そうとした意欲的な論文である。本論文の主要な貢献は次の三点である。

第一に、ケインズによると、芸術は、「善い心の状態」を喚起する故に「善」を増大し、1人1人の「善」の増大が社会全体の「善」の増大をもたらし、「望ましい状況」を作り出す。また、芸術に喚起されるより細やかな感情の動きを意識するために、人間はより高い知性を獲得する必要がある。その意味で、芸術は人を高めるきっかけとなり、「善い心の状態」へと導かれる可能性を増大させる。「善」に満ち豊かで健全な社会を建設するために、社会の構成員がそういう社会を真剣に望みそれに向かって歩もうとする「公共圏」を創出・拡大する手段として、芸術を適切に用いることが可能であり、その意味で「芸術」は「公共性」を有することを多くの文献研究から描き出している。

第二に、ケインズが芸術支援団体として財政支出を受けながら、政治・行政から口出しされず、芸術のことは芸術家に任せるアーツ・カウンシルのような機構が有効であると考えていたことを示すことで、条件付きながら公的な財政支出の必要性を明らかにしている。しかも、政治的体制による誤った芸術利用によって、全体主義思想などを醸成・拡大するような「公共圏」の創出・拡大を起こさせないために、芸術家は政治的に中立的であるべきであるという主張をケインズの考えに立脚させていることである。

第三に、ケインズの考えの中に芸術消費と芸術支援の牽引力として、ジェントルマン層を軸とした新興富裕層に期待をかけていることを明らかにしている点である。官僚として民間人としての彼らの働きによって、「善い心の状態」をもたらす本物の善い芸術を普及させ持続させることが、「公共圏」の創出・拡大に繋がろう。芸術支援は、ケインズのようなジェントルマン層軸とした新興富裕層に位置する者にとって公的私的義務であること主張していることを明らかにしている。

本論文の優れた点は、このように、ジェントルマン階層のパトロネージと中立的な立場での財政支援の重要性を「公共性」という哲学的見地から結びつけようとしているところにある。まさに、このような考えがケインズをしてアーツカウンシルの運営に情熱を注がせたのである。

一方、これらの議論はいくつかの問題点を含むことになる。まず第一に、「公共性」概念の曖昧さである。「公共性」、中でも本論ではハーバーマスの「公共圏」という発想に依拠しているが、これまでも多くの議論がなされてきており、「公共性」が具体的に何を意味しているかは曖昧なままである。これを軸に芸術支援を論理的に是とすることに論理的な難しさは残ろう。

第二に、なぜケインズかである。確かにケインズはアーツカウンシルの運営に力を注いだわけであるが、基本的には経済学者であり、彼の議論が文化経済学全体の中でどのように位置づけるかは難しさが残る。また、ケインズがアーツカウンシルに関与した膨大な文献は未だ十分に活用されていない。

第三に、ジェントルマン階層のパトロネージの重要性を一般的に論じることが可能かと言う点がある。すなわち、特にイギリス的な階層観に基づいており、例えば日本のような国でも同様に議論できるかは疑問の残るところである。より広い階層のパトロネージに関して議論する必要があるか検討が必要になる。

また、結論で簡単に述べているところであるが、ジェントルマン階層の少ない我が国で芸術支援を行って行くためには、具体的に芸術の経済構造がどのようになっているのか理論的・実証的に研究を深めて行く必要がある。

しかしながら、これらは本論文のユニークで優れた多くの貢献に比べれば些細なものであり、その価値を損なうものではない。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認めた。なお、平成16年6月24日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。